

雨に嘆く

前崎一成

午前七時十四分が特別な時刻であるから、僕は繰り返すこの退屈な毎日を過ごすことができているのだと思う。小さなバス停にある小さなベンチの端に座りながら、今日もまた彼女を待つ。

今、時間は流れているのだろうか。目の粗いアスファルトの道路に雨粒が反射して、僕の視界を曖昧にする。降り続く雨。梅雨の象徴。僕の嫌いな季節。

眼前の光景はずっと変わらない。同じ時間に、同じ場所で、他にすることもなく、同じものを見ている。だから僕は時間を感じることができなくなってしまったのだろう。ループする一コマ。不変の日常を繰り返す。

バス停の簡素な屋根を雨が穿ち、僕の鼓膜を騒がしく揺らした。その音が僕を現実追いやって、時間が流れているのだと実感させる。強い雨だ。降りしきる様は矢のように、その冷たさはきつと人を貫く。心はそういったものから、弱いから、彼女には身を守る盾が必要だったのかもしれない

い。水色の傘に包まれながら、今日もまた彼女はこの場所にやってくる。

時間は止まっている。いや、違う。止まったのだ。漫画にして一コマ。交わす言葉は存在しないから、フキダシはいらぬ。ベンチの両端に座る男女。彼女が着ている制服は、かつて僕が通っていた高校と同じものだ。背もたれには色褪せた飲料メーカーのロゴが描かれている。一人分の空席が果てしなく遠い。モノクロだ。次のコマ。彼女が七時十四分発のバスに乗り込んで学校へ向かうまで、時間は流れぬ。静止する。僕はそれを望んでいるのかもしれない。そうではないのかもしれない。全てが曖昧なのだ。僕は。雨の音が聞こえているのかさえも、分からなくなっている。

邂逅と離別を繰り返しながら進んでいく。僕らはそういう生き物だ。



彼女には毎朝の習慣があった。とはいっても、それは

起きてからランニングをしたり、朝食時にコーヒーを飲んだりするような類のものではない。常人には理解できないような、彼女の中だけで意味を持つようなものだった。

バス停近くの自動販売機で缶ジュースを購入し、ベンチの中央、僕と彼女の間の空席に置くこと。僕は学校のある平日は毎朝ここで彼女と顔を合わせるのだけど、その習慣を欠かした日はなかったように思う。こんな田舎で、この時間のバスに乗る客はほとんどいない。確か、このバス停を廃止しようという動きさえあったはずだ。だから僕と彼女の間には、三百五十ミリリットルのアルミ缶が常に存在していた。

僕はたぶん、彼女を救いたいのだろう。悩みがあるのなら解決してあげたいし、それができなくても相談に乗ってあげたい。彼女が重荷を背負っているのならば、少しでもそれを取り除いてあげたい。憂を含んだ瞳で雨をじっと眺めているその姿。思い詰めた表情。僕はずっと見てきた。

彼女はバスに乗り込むとき、買った缶ジュースを未開封のままゴミ箱に捨てる。百二十円をそのまま捨てるより、彼女が缶に詰め込んだ感情の分だけ、きっとその行動には

重みがある。

分不相応な夢だ。分かっている。ただここに座っているだけの僕が。毎朝ただ彼女と顔を合わせているだけの僕が。彼女の止まってしまっている時間を動かせるはずがないのに。

彼女に視線を向ける。肩のあたりまで伸びた黒い髪はまとめられることなくスツと流れていて、少し湿っているようだった。

彼女は携帯電話の画面を見ていた。二つ折りのタイプで、色は黒。そういえば、携帯電話を操作する彼女の姿を最近よく見かける。いや。以前より見かける頻度が増した、という表現の方が正しい。

僕はそのとき、彼女が誰かと電波で繋がっているとき、耐え難い疎外感に襲われる。時間が止まっているのは自分だけだということに対する焦燥と孤独。彼女の中にある時計の針が進んでしまうことへの恐怖。

彼女にとって望ましい未来が訪れることを、僕は恐れてしまっている。このまま時間の流れが止まることを、僕は願ってしまっている。

けれどたぶん、彼女の思い詰めた表情が晴れて、心の底から笑えるようになったのだとしたら、僕はそれを誰よりも喜ぶことができるだろう。「良かったね」と笑いかけることも、「心配したよ」と気遣うこともできないけれど、このベンチの端っこで傍観者として、彼女の幸せを祝福することはできるはずだ。その確信はある。

曖昧なのだ。僕は。何がしたいのかも分からず、ただ情性のみで日常を過ごし、本当の望みも自覚できていない。

降り続く雨の中、屋根の下にいる僕は傘を差す必要はなく、ただ自分の無力さを嘆いていた。



変化があったのは、雨の日の減少と少しずつ上昇する気温から、梅雨の終わりを感ぜさせる日だった。でもそれは劇的な変化ではなくて、それ以前も漸次的にはあるけれど変化していたのだと、今となっては思う。

天気は曇りだったけれど、今にも雨が降り出しそうな空模様だ。たぶん、雲の底には大量の水が溜まっていて、あ

とほんの少しの重さが加わってしまっただけで、途端に溢れ出してしまふのだろう。

最初は、今日もまたいつも通りの七時十四分を迎えるのだと思っていた。閉じた傘をベンチに立て掛け、一人座る彼女。隣には缶ジュース。無数にある朝の風景の、何の変哲もない一コマ。もはや深い安堵さえ覚える。

今日が変化の一日だと確信したのにはいくつか理由がある。一番大きな要因は、この時間には滅多にいない乗車客が訪れたこと。そして、彼が彼女の知り合いであったことだ。

「おはよう」

彼は開口一番そう言った。無論、僕と缶を一つ隔てた彼女に対して。日焼けした肌と短髪。いかにもスポーツをやつてそうな外見の彼に似つかわしい、野太い声だった。

「なんで」

彼女は開口一番そう言った。朝の挨拶に対する返答としては酷く不適當なはずなのに、この一コマのフキダシにすっぽりと収まる。存外に澄んだ瞳をしていた。

「いやあ、いつもより早く目が覚めちゃってさ。こりゃ今

日は雨が降るな」

そう言いつつ彼はベンチに座ろうとし、そこで発見する。一人分の席を取る先客。三百五十ミリリットルの塊。

この場にいる全員が揺れ動いている。僕は思った。今、この瞬間は、四コマ漫画でいう三コマ目なのだ。バス停で待つ僕のもとに彼女がやって来るのが一コマ目。僕と彼女がベンチに座りバスを待っているのが二コマ目。ずっと繰り返してきた日常のその先。僕は今、その瞬間に立ち会っているのだ。そう思うと嬉しく、悲しい。

「それ、アイツが毎朝飲んでたっていう……」

彼が視線だけで「それ」を指す。『元気の果実！ オレンジジュース』なんて間抜けな名前が、この雰囲気にあまりに相応しくなくて奇妙な気分になる。

正面に立つ彼の問いに、彼女は首肯で応えた。

「朝練の時間が早いからって、朝ごはん代わりに毎朝飲んだの。この席で。私のすぐ隣で」

僕は胸が詰まりそうになる。彼女の声は、思い出を懐かしむときの、誰かを慈しむときの声色をしていた。人の強い感情は、どうしても他人に影響を及ぼすものなのだ。喉

の閉塞を感じる。

彼は言葉を探しているようだった。彼女に何とすべきか迷っているのだろう。たとえば、過去を引きずるのは仕方ないよ、という慰撫。たとえば、アイツはもういないんだという叱咤。彼女の未来に何らかの影響を与えようと、彼女を救うことができればと、彼は必死になって悩んでいる。僕はそれが羨ましかった。きっと彼は、それが幸福なことであるとは気づいていないのだろうけれど。

彼女はその葛藤を見透かしたかのように小さく笑った。

「大丈夫。私前を向いていないわけじゃないよ」

え。散々悩み抜いたあげく、発した言葉がそれだった。人が虚を突かれたときに、反射的に発声される音。

「彼のことを忘れないとか言いながら、たぶん私は将来、次の恋人を見つけて、結婚して、子供を産んで、幸せな家庭を築くんだと思う。時間が経つので、そういうことから」

だから、と続ける。

「彼のことでどうじうじ悩めるのは今だけなんだよ。思い出に浸れるのは今だけなんだ。彼のことは乗り越えた、過去

の思い出は踏み越えた。そんなフリをすることはできるけど、私はそうやって、今の自分を無駄にしたくない」

強い言葉だった。強い意思だった。彼は何も言い返すことができないらしく、彼女の瞳を見つめるばかりでその場に佇んでいる。

彼女は前に進んでいた。ほとんど止まっているような速度だけど、それでも時間は流れていた。

良いじゃないか。その場で足踏みをするだけでも。足を止めない限り前へ進めるのだから。

「そうだ。うん、そうだな」

彼はふう、と息を漏らし、少し笑う。自分の大切な何かを確かめるとき、人はあんな笑い方をするのだ。

「ねえ」

「ん？」

「結局、君は何をしに来たの？ 朝はごはんの支度で忙しいって前言ってなかった？」

「だから、偶然いつもより早く目が覚めてだな……」

「それはもういいから」

彼女の責めるような視線に耐えかねて、彼は反論を諦め

たようだ。

「俺はほら、おばさんからお前のこと頼まれてるからさ」

叱られている子供のような態度で、言い訳をするように言葉を発する彼。対して、母親のような、姉のような態度で接する彼女。これでは、どちらが世話を頼まれているのかわからない。微笑ましい光景だと思った。

「じゃあ、頼まれてなかったら来なかったわけだ」

「いや、そういうことではなく！」

彼の狼狽する態度がおかしいのか、軽口をたたいて弄ぶ。その声には悪戯心が多分に含まれていて、僕がベンチの端から眺めていた限りで、最も明るい表情だった。

「やれやれ。私がかすでも思ったの？」

「……思ったよ」

「え？」

「思ったさ！」

予想外に強い口調に、彼女は目を白黒させている。それを気にも留めず、彼は続ける。

「だって、今日は——」

その言葉が最後まで発せられることはなかった。代わり

に聞こえるのはバスのエンジン音。いつの間にか、訪れていた。七時十四分。僕の特別な時刻。

「なんてベタな四コマ漫画だろう。何かを抱える少女の現状。そして自分の傷と向かい合い、誰かの助けを受けた。

この漫画のオチは、もう決まっているようなものじゃないか。ありふれた陳腐な物語。

けれど。

分かったことがある。僕が何をしたいか、何を望んでいるのか。そんなのは重要じゃない。逆だ。僕は何かを成し遂げたいと、そう望んでいたことを証明するためにこの世界に爪痕を残すのだ。

もう手を引っ張ってあげることができないけれど。触れているかどうか分からないような優しきで、背中をそっと押すぐらいのことならきつとできる。そして僕は確信するのだ。僕が彼女の幸せを心の底から祈っていたということ。を。

離別と邂逅を繰り返しながら進んでいく。僕らはそういう生き物だ。

彼の言葉の続きを、僕は知っている。

今日は僕の命日だ。



毎朝繰り返す動作だった。いつもの一瞬だった。

隣の席に置いた缶を持ち上げる。私はその度に、減っていない中身の分だけその重さを受け止めて、少しだけ悲しくなる。そう、少しだけだ。

愕然とした。何故だろうか、胸が詰まる。喉の閉塞を感じる。触れていないはずのプルタブが開いていて、いつも感じるはずの重さが無い。

思わず振り返る。けれど、いつものベンチがあるだけだった。

閉じ込めていたはずなのに。私の後ろ向きな感情を。三百五十ミリリットルの缶なんかで収まるはずのない感情を。押し潰して、押し殺して。必死に。

缶をそっと口もとに寄せて、飲み口に唇を重ねた。酷く懐かしい味がする。

少しだけ涙が出た。